2020/06/07

ヨハネの福音書　講解メッセージ①

「初めに、ことばがあった」ヨハネ 1:1-5

「初めに、ことばがあった。」（ヨハネ 1:1）

このヨハネの福音書の冒頭は大変有名ですが、実は、「初めに、ことばがあった」と言ったのはヨハネが最初に言ったものではなく、当時の西洋哲学から引用された言葉です。

哲学というと堅苦しいもののように感じますが、「私たちはなぜ存在しているのか」という疑問を追求する学問です。「なぜ自分は生きているのか」ということは、誰でも一度は考えたことがあると思います。この疑問を解き明かそうと真剣に取り組んだのが、世界最初の哲学者タレス（BC6 世紀）です。彼は、世界の始まり（アルケー）は何かを追求し、この世に存在するものはすべて制約がある、だから、始まりは「無制約」のものであると考えました。そしてピタゴラスは、この世の現象を背後で支配している規則があるはずだと考え、タレスが追求した無制約なものとは「数」だと考えました。続いて、ヘラクレイトスが、この世にあるものは常に変化しており、すべては一瞬で消え失せるものだから、「アルケー」とは「変化しないもの」であると考え、それを「ロゴス」と定義したのです。ここから、「万物はロゴスによって成り立っている」ということが、哲学の基礎になりました。「初めにことばがあった」の「ことば」には、この「ロゴス」が使われています。さらに、パルメニデスが、「本当に存在するものは、生まれも滅びもしないし、部分も持たず、ただある。それが私たちを支配している」とし、ここに神の概念が生まれたのです。

そして、BC4 世紀、ソクラテスが（彼の弟子のプラトンの証言によるが）、そして、プラトンが、人の土台はイデア（観念）であって、それが先にあるから私たちは考えることができるのだと説きました。そして、プラトンの弟子であるアリストテレスは、「私たちは変化する。それは、変化しない法則があることを前提としないと説明がつかない。」と、「アルケーがなければ、私たちは説明がつかない」というタレスの哲学と同じ結論に至ったわけです。ここに、万物の始まりは「アルケー」であり、それは「ロゴス」であるという西洋哲学の大枠が出来上がり、アリストテレスは哲学の用語を整理して一つにまとめ、それが今日に引き継がれています。

では、なぜ変化しないものから、なぜ私たちのような変化するものが生まれるのでしょうか。アリストテレスはその関係を、「動かないもの」と「動かされるもの」と言いました。私たちの魂のうちには、「自発的に動く運動」と「静止の原理」があり、その自発的に動く運動とは特定の「ロゴス」であり、それは「神」だ、「アルケー」とは「神」だと説明しました。アリストテレスは、神がいなければ説明できないことが多々あるとして、それを「不動の動者」と呼び、それがロゴスであり、アルケーであり、私たちの魂はそれによっているとしました。そうしないと人間もこの世界も、説明がつかないからです。つまり、私たちの内には神がいて、それが私たちの始まりであり、それが私たちの中で運動をしていて、それによっ

て私たちは動かされているということです。このアリストテレスの影響は非常に大きいもので、これに基づいて哲学は発展していったのです。

このように、「初めに、ことばがあった」という一文には、当時の人たちには常識であったそうした哲学的な背景があります。初めにロゴスがある、ということは当時の常識だったわけです。ロゴスとは神であり、無制約なものであり、永遠であり、自由であることを彼らは知っていました。そこでヨハネは、その言葉を使って、「そのロゴスとは、イエス・キリストなのだ」と教えているのです。

> 「ことばは神とともにあった。ことばは神であった。
> この方は、初めに神とともにおられた。」（ヨハネ 1:1-2）

「ことば」は、イエス・キリストを指しますから、イエス・キリストは初めからおられ、神ご自身であるということを、この御言葉は語っています。このことは三位一体の神を理解する上で、非常に重要です。

父なる神とイエス・キリストと聖霊なる神が三位一体であることはキリスト教の基本ですが、神はおひとりであるということを自分の経験をもとに理解しようとすると、三位一体について誤った解釈をしかねません。たとえば、神はおひとりなのだから、初めにおられたのは父なる神だけであって、父なる神によって御子イエス・キリストが造られ、それを取り持つために聖霊が造られて三位一体の神ができたといった具合です。もちろん、このような考えは、正しくありません。

聖書理解に限らず、私たちは自分の経験をもとにして出来事を理解しようとするものす。しかし、自分の経験で聖書を理解しようとすると、いろいろな解釈が生まれて、結局、聖書の教えがわからなくなってしまいます。神とは、人の理解をはるかに越えた方です。聖書を読むときに大切なことは、自分の経験や感覚を捨て、聖書の言葉をどこまで受け取れるかということです。その神について、聖書が私たちに教えていることは、神は初めから父と子と聖霊であったということです。

数学は、幾何学に対して、自分の経験や感覚を排除した結果、すべてにあてはまる法則が見いだされ、大きく発展しました。聖書も同じです。自分の経験や感覚を優先してしまうと、御言葉を理解することはできません。知恵によって神を知ることはあり得ないと聖書は教えています。「自分がどう思うか」ではなく、神のことばを信じる信仰によって、私たちは救われます。自分の感覚ではなく、神の法則を見つけ出し、その法則で見なければ、聖書を理解することはできません。

聖書が「ことばは神とともにあった」と教えているということは、父と子は初めから一つだったという意味です。ですから、神のことを「愛」というのです。「愛」とは関わりのことです。一人では関わりを持つことはできません。父と子と聖霊という三人の神が「唯一の神」を形成しておられるからこそ、その関わりが愛なのです。神の愛の関わり方は、互いを無条件で受け入れるというものです。これを「アガペー」と言います。「アガペー」は、イエス様

が初めからおられたのでない限り、説明がつきません。

> 「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」（ヨハネ 1:3-5）

世界が造られたときの様子は創世記の冒頭に記されていますが、この箇所はそれをさらに深く掘り下げたものと言えます。「神が人を造った」と聞くと、私たちは、神が粘土細工のように人を造った様子を思い描き、神の外に人を造ったイメージを持ちがちですが、それは正しくありません。「すべてのものはこの方によって造られた」とは、神はご自分の外に人を造ったのではなく、キリストを土台として人を建て上げたということです。初めが神であり、その方が私たちの土台であり、いのちであり、人の光、すなわち、あなたの魂だと言っているのです。

このことは、「人間とは何か」という問いの答えでもあります。人間とは「意識」です。人間が意識を持ち、自分を認識できるためには、自分の中に自発的で普遍的な運動がなければなりません。それがロゴスです。初めにロゴスがなければ、私たちは何かを意識することはできないのです。このことは、18 世紀以降、カントによって、さらに精密に明らかにされていくのですが、それよりはるか前のヨハネの福音書にすでに書いてあるのです。

「そのいのちが人の光となった」とは、あなたの土台であるイエス様があなたの光となった、すなわち、その光はあなたの中にあるという意味です。キェルケゴールという哲学者は「問題を解決したければ、自分を見よ」と言いました。私たちは問題にぶつかったとき、自分の外側に解決を探そうとしてしまいますが、そうではなく、自分の中に解決があるというのです。「あなたの中にあなたの光はある。それはあなたの土台であり、あなたの魂である」とヨハネは語っています。

「魂」とは、正確には、神のいのちが貸し出されているものです。魂を持っているということは、神のいのちを持っているということで、それが私たちの中の光です。「光は闇の中に輝いている」とは、「この光は、何によっても止めることができない普遍的な運動である」ということです。この「初めに普遍的な運動がある」と定義された理論を、哲学の世界では「イデア論（観念論）」と呼びます。私たちの中には、誰にも止めることのできないいのちの運動があり、そこに外からの刺激や情報がぶつかるときに、何かを感じ、意識が生じ、人は人となるのです。このいのちの運動がイエス･キリストであると、ヨハネは伝えているのです。

■神のなさる普遍的な運動とは

神がする運動とは何でしょうか。神は三位一体で、父・御子・聖霊なる神は一つとなって存在しておられます。ですから、神がする運動とは、一つになろうとする運動です。神は私たちと一つになろうとし、自分の中にこの運動があるため、人は人との調和を求めるのです。

神は、私たちと一つになるために、「私とあなたは同じだ」という運動を展開なさいます。人間とサルはどんなに仲良くなっても一つになることはできません。ルーツが違うからです。しかし、神は私たちに対して、「あなたは私と同じ出身だよ」「私が持っているものをあなたは皆持っているよ」「あなたと私は一つだよ」と示し続けておられます。それが神の運動です。

神が持っているものをすべて持っているということは、私たちは永遠や自由を持っているということです。だから、誰から教えられたわけでもないのに、人はみな永遠や自由を求めています。ところが、私たちの体がこの世界で集める情報は、それをことごとく否定します。なぜなら、この世界は、悪魔によって持ち込まれた「死」によって、死の世界になったからです。魂は、「永遠がある」と言いますが、この世界に永遠はありません。私たちの体は必ず老いて滅びます。それで私たちは生きたいという願望を抱くのです。また、魂は「自由だ」と言いますが、この世界には、様々な制約があり、完全に自由ではありません。ですから、私たちは自由を求めるのです。子どもが親に反抗するのも、魂が自由を知っているからです。

このように、体がこの世界で集める情報は、神が発信している普遍的な運動を否定する刺激を持ち込んできます。この矛盾が「不安」です。

人間とは、「魂」と「体」の上に成り立つ「精神（意識）」のことです。魂は、「あなたは永遠であり、自由だ」という神からの情報を集め、体は、この世界から、それらを否定する情報を仕入れてきます。そして、その中間に立つ「精神」が、目に見える情報を信じて、永遠も自由もないと信じるわけですが、それでも魂は神と一つになろうとする普遍的な運動をやめませんから、不安が生じてしまうのです。これが、人間が抱える問題のすべてです。私たちが苦しみを抱えるとき、その原因のすべては、神からの情報を否定し、世の中の情報を信じているところにあります。ですから、すべての問題の解決は、神が語る情報を肯定するところにあるのです。

世の中の情報を信じることを「不信仰」と言い、神の情報を信じることを「信仰」と言います。人間とは、体でも魂でもなく、神のいのちと体のいのちに支えられている精神（意識）です。精神は、神からの情報と体が集めてくるこの世の情報との中間に立っています。そして、目に見えるこの世の情報を優先し、そちらを承認します。心の奥底で語りかけられている「それは違うよ」「それは悪いことだよ」「永遠がある」「自由がある」という神の言葉に対して耳をふさぎ、見える安心を求めてしまうのです。これが私たちの罪の姿です。

このことを解き明かしたのが、キェルケゴールです。しかし、それは、ヨハネの福音書は、とうの昔に、そのことを教えているのです。

■自分の中にある神のいのちを肯定せよ

> 「神である主は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」（創世記 2:7）

神は人にご自分のいのちを吹き込んで、人としました。神が吹き込んだ「いのち」は、複

数形で表されており、神のいのちを表しています。神のいのちが貸し出された結果、人は物事が意識できるようになり、「生きものとなった」のです。魂とは、私たちに与えられた神のいのちです。つまり、神は外からあなたを見守っているわけではなく、私たちは土台である神に背負われて生きています。ですから、神はあなたを守り続けるのです。

私たちがぶつかる問題の原因はすべて、魂が受けとる神からの情報を否定し、肉が受け取る地上の情報を信じるところにあります。そのために不安が生じ、葛藤が生じているのです。ですから、問題の解決は、人の光である神のことばを肯定することです。神はことばであり、ことばで語りかけます。そのことばを肯定することが信仰です。光はあなたの中に貸し出されていますから、あなたはすでにそれを持っています。問題の解決はあなたの外にあるのではなく、もう自分自身の中に与えられているのです。それは神のいのちです。これを受け入れるには、この世界に対して絶望するしかありません。この世界に希望を持つ限り、人は神のことばを否定し続けます。この世界に希望を失ったとき、初めて光が見えてくるのです。あなたがすでに持っている神のいのち、その光に目を留め、そのことばを肯定するなら、それが脱出の道となります。